

TALK O N DEMAND

マル激
トーク・オン
ダイヤモンド

ビデオジャーナリストと社会学者が紡ぐ、
ネットの新境地

橋川良寛 (blueprint) | 構成
words by Yoshihiro Hashikawa

今月のゲスト

渡邊芳樹

[元駐スウェーデン特命全権大使]
わたなべ・よしき



1953年、北海道生まれ。75年、東京大学法学部卒業。同年、厚生省入省。年金局長、社会保険庁長官などを経て2010年から13年駐スウェーデン日本国特命全権大使。17年より日本赤十字社常任理事。著書に『スーパーモデル・スウェーデン 変容を続ける福祉国家』(法研)など。

神保哲生 [ビデオジャーナリスト]

1961年生まれ。ビデオジャーナリスト。ビデオニュース・ドットコム代表。代表作に『ツバルー 地球温暖化に沈む国』(春秋社)、『地雷リポート』(築地書館)、『PC 遠隔操作事件』(光文社)など。



宮台真司 [社会学者]

1959年生まれ。東京都立大学教授。社会学者。代表作に『日本の難点』(幻冬舎新書)、『14歳からの社会学』(世界文化社)、『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』(幻冬舎)など。



●『マル激トーク・オン・ダイヤモンド』とは

神保哲生と宮台真司が毎週ゲストを招いて、ひとつのテーマを徹底的に掘り下げるインターネット放送局「ビデオニュース・ドットコム」内のトーク番組。スポンサーに頼らない番組ゆえ、既存メディアでは扱いきれないテーマも積極的に取り上げ、各所からの評価は高い。(月額550円/税込)



HP: <http://www.videonews.com>

自然体「スウェーデン流コロナ対策」の凄み

新型コロナウイルスが猛威を振るう中、欧米諸国が強制力の強い行動制限を導入する一方、スウェーデンはこれらを行わず、コロナへの対応を国民の自主的な判断に委ねることを選択し、話題となった。だが4月以降、スウェーデンの死者数が急増したため、報道は批判一色に。今回は同国の政治や文化をひもときながら独自のコロナ対策の本質を見ていきたい。

神保 今回はずっと取り上げたいと思っていたスウェーデンのコロナ対策に注目してみたいと思います。

スウェーデンは周辺国が軒並みロックダウン(都市封鎖)や外出禁止令を出す中で、頑なにそうした制限をせずに、世界でも独特なコロナ対策を行ってきたことが注目されてきました。しかし、日本のメディアでは、「あれは失敗だった」などという誤った情報が多く出回っていましたので、そのあたりのファクトもきちんと押さえたいところです。それと同時に今日、ゲストの方には、コロナ対策の話もさることながら、そのような独自のコロナ対策を貫くこ

とができる、スウェーデンの成り立ちやお国柄や政治的背景も、ぜひ聞いてみたいと思っています。

ゲストをご紹介します。コロナや感染症学の専門家ではありませんが、スウェーデンの専門家においていただきました。元駐スウェーデン大使の渡邊芳樹さんです。

渡邊さんは毎日新聞に「コロナにもぶれぬ『自律』の国」として、スウェーデンのコロナ対策について肯定的な見解を寄稿されていました。スウェーデンにはコロナ対策を決定する上でのキーパーソンとして、疫学責任者のアンデシュ・テグネルさんという

疫学者がいるのですが、渡邊さんの記事が出た段階では、日本では彼のコメントの一部が文脈とは無関係に抜き出され、かなり誤解されている面があったように思います。その意味でも渡邊さんの記事は重要だったと思いますが、まずあのタイミングで寄稿されようと思われた理由から聞かせてください。

渡邊 一言でいうと、半分恩返し気持ちはです。もうひとつには、このコロナを通じて、やはり社会の特質というものが炙り出される。そこでアメリカ及びイギリスを中心としたスウェーデン・パッシングは是正してやらなければならないと思いました。



今年8月、スウェーデンのコロナ対策について発言する疫学者のアンデルシュ・テグネル氏。(写真/共同通信)

冒頭で紹介したように、スウェーデンはロックダウンをしなかったことが世界から注目されましたが、その一方で、特に検査を推奨せず、もし熱や咳が出たらなるべく家にいることを奨励する政策をとってきた。実際、ほとんど強制的な措置はありませんでしたが、50人以上の大規模な集会はやらないうことや、高齢者はなるべく屋外に出ないこと、仕事はなるべく在宅勤務にすること、などを推奨しています。小中学校は一斉休校などは一切行いませんでしたが、高校以上は元々オンライン授業が多かったため、コロナ後もそれは継続しているそうです。スウェーデンが特にアメリカやイギリスからの攻撃に晒されているのは、両国はロックダウンも休校もしているのに、それをやらなかったスウェーデンがうまくいってしまおうと、逆に彼らのおつた施策が間違っていたことになってしまおうからです。元々ロックダウンなどの強制的措置に対しては、経済的影響が大きいう理由から、不満や反対が根強くありました。また、政府が民間企業や個人に対し、そのようなことを強制的に強いることに理念的に抵抗がある人も少なからずいたようです。

だから、スウェーデンで死亡者が多く出てきたことが、ロックダウンを実施した国にとっては朗報になっていった面があったことは確かです。しかし、後で詳しく説明しますが、スウェーデンで当初感染者や死者が多く出た理由は、ロックダウンをしなかったからではなく、実は別の理由がありました。そして、テグネルさんがその理由について海外メディアのインタビューで「誤算だった」と認めたところ、世界中のメディアが、「スウェーデンのコロナ責任者が同国のコロナ対策が間違っていたことを認めた」と報じてしまいました。しかし、スウェーデンは4月に一時死亡者が急増しても、その原因がはつきりしていたので、ロックダウンをしないという方針を貫きました。そして、その原因部分にしっかりと手当てをした後は、

神保 まず最新のデータを見ていただきたいのですが、8月25日現在、スウェーデンは感染者数がおよそ8万人、死亡者が5813人。スウェーデンの人口は1010万人ですから、1000万人あたりに換算すると575人となります。これは今、世界で死亡者が断トツのアメリカの547人よりも多く、アメリカよりも死亡率が高いこととなります。ヨーロッパの中ではドイツがとびきり優等生で、100万人あたり111人しか亡くなっていませんが、イギリスやフランスあたりと比べてもスウェーデンの死亡率はかなり高いといえます。ちなみに日本の100万人あたりの死亡者は9人です。

宮台 ただ、東アジアでは日本が最も多いほうですね。ほとんどの国は5人以下ですから。

神保 いずれにしても、この数値を見る限りスウェーデンは決して優等生とは言えませんが、実はスウェーデンは感染者の高齢者率がとても高いという特徴があります。そしてこれには理由があります。

感染が拡大するにつれて、高齢者が多く出た理由が、スウェーデンで当初感染者や死者が多く出た理由は、ロックダウンをしなかったからではなく、実は別の理由がありました。そして、テグネルさんがその理由について海外メディアのインタビューで「誤算だった」と認めたところ、世界中のメディアが、「スウェーデンのコロナ責任者が同国のコロナ対策が間違っていたことを認めた」と報じてしまいました。しかし、スウェーデンは4月に一時死亡者が急増しても、その原因がはつきりしていたので、ロックダウンをしないという方針を貫きました。そして、その原因部分にしっかりと手当てをした後は、

感染者、とりわけ重症者や死者数が次第に減り始め、今では軽症者は出ていますが、ほとんど死亡者はいない状態になっています。一度もロックダウンをしていないにもかかわらずです。宮台さん、ここまでいかがでしょうか？

宮台 まず素人でもわかることとして、「症状が出たら自宅待機」というのが最も合理的なやり方です。それは「検査は陰性だが、本当は感染していて無症候であるがゆえにうつしてしまう」ということがどこの国でも起こりがちなので、マスクと同じように検査も過信しすぎては困る。スウェーデンが他の国と違うのは、マスクをしると脅迫しないし、検査をしなくてもいい。それはテグネルさんの功績だと思えますが、完全な対策というものがないので、何かを過信することはまずいし、それゆえのバッシングもまずいと。そういうテグネル流の構えというものが、今のお話だけでもわかります。

渡邊 医療提供体制に負荷が大きいのでは検査は当初それほど多くなかったのですが、そういう時期は過ぎて、6月からは意図的に検査を増やしています。例えば、最寄りのプライマリーケアセンターで無料検査という政策をとった。当初陽性判定が増えましたが、それも次第に減少しています。問題は重症者と死亡者で、これは的確に下方に数字が刻まれていており、今は死亡者がゼロという日も珍しくなくなりました。

神保 日本でも同じようなことがありますが、一時感染者数が急増した原因のひとつが、検査数を一気に増やしたからでした。ただ、その場合は確認される感染者の数は増えますが、そのほとんどが軽症者で、重症者数や死者数はそれほど増えません。ただし、問題は感染者が増えたのを放っておくと重篤化したり、死亡するリスクが高い高齢者にうつし

てしまふ危険性があります。だから、その部分の手当をきちんとしておかないと、結局、時間差で高齢者が感染してしまい、結果的に重症者や死亡者が増えてしまいます。

渡邊 本来のスウェーデン人には、三世代同居はほとんどありませんので、家庭内で若い感染者が高齢者にうつしていくメカニズムがありません。移民難民をめぐる特段の背景から4月に多くの要介護高齢者が感染し死亡したという事態がありました。それも乗り切りました。またPCR検査を増やしても、陽性者が増え、重症者が増えることにはなっていない。日本や他の欧米諸国が羨む状態です。

求められる強いリーダーシップ、そして情報の透明性

神保 ここでテグネルさんの記者会見での発言と、私がZoom経由で行ったスウェーデン・カロリンスカ大学の上級医・宮川絢子さんのインタビューを、合わせてご覧ください。

記者 昨日、アメリカのトランプ大統領がスウェーデンは苦しんでいると発言しました。その意見に同意しますか？

記者 トランプ大統領が、スウェーデンの状況はかなり悪いようだと言っていますが、同意しますか？
アンデシュ・テグネル いいえ、以前から申し上げているように、我々はそうは思いません。もちろん我々も苦しんでいますし、それは他の国も同様です。大統領は医療体制のことを言ったのですが、スウェーデンの医療体制は健全な状態を維持しています。医療関係者には大きな負担がかかっており、彼らにとっては毎日が戦いですが、スウェーデンの医

療体制はこれまでもいい結果を出しています。スウェーデンの医療体制は世界最高水準にあり、これからもそうあり続けるでしょう。

宮川絢子医師 スウェーデンは元々憲法で「国が国民の行動を制限してはいけない」という縛りがあります。ロックダウンは憲法上できなかった、というのが大前提にあるとは思いますが、やはり国民の自主的に任せるという風潮が元々ありますので、国民が自主的に行動を慎むという方針を取ったのだと思います。

ロックダウンしないなどの対策が注目されていたが、日本では「失敗だった」という誤情報が多く出回った。

確かに死者数は多く、それはスウェーデンの失敗ではあったのですが、内訳を見ると、死者の90%が70歳以上の高齢者で、70歳以上の亡くなった方たちの8割が要介護者でした。これはロックダウンをしなかったことに原因があるのではなく、元々スウェーデンの介護政策に問題があり、そのためウイルスが介護施設に持ち込まれたために起きたことです。具体的には、介護労働者の約3割が休業補償のないパートタイマーだったため、政府から「少しでも症状があれば休むように」という指示は出ていましたが、多少調子が悪くても隠して勤務を続けるということが行われていたようです。

また、そのパートタイマーの多くを占めるのが移民で、パンデミックの当初に移民が多く住む地域でクラスターが発生しました。そういういくつかの要

因があつて介護労働者から高齢者へウイルスが持ち込まれたと。

スウェーデンのコロナ対策の究極の目的は、医療崩壊を起こさないように感染をコントロールすることでした。それを行うためにロックダウンが有効かどうかということについては、私はよくわかりませんが、ただスウェーデンが経済のためにロックダウンをしないと言ったことはありません。むしろ、今後このパンデミックが長期間続くことを考えたとき、持続可能な政策が必要であり、国民の精神的・肉体的な健康状態を考えると、やはりロックダウンという方法はデメリットのほうが大きいと判断したのだと思います。

神保 日本も状況もご覧になっていると思いますが、日本人としてそちらに行っていて、コロナに対する日本の反応と、スウェーデンの反応を比べて、どんな違いを感じられますか？

宮川 やはり今までに経験したことのないパンデミックですので、専門家でも意見が分かれており、何が正解かわからない状況です。こういう状況の中では、やはり政治家と専門家がタッグを組んでひとつの明らかな方向性を示す、リーダーシップを示すということが大事です。スウェーデンではそれが行われており、政策が間違っているのか正しいのかわかりませんが、そういった中央政府の態度があるために、国民は動揺していません。逆に日本は非常にうまくいっていると思いますが、この2つのポイント

渡邊 「高齢者に冷たいのではないか」という議論は、スウェーデンにいつでもつきまといまいます。ちなみにそのICU入室でいうと、苦しい治療に本人の同意が必要であることはもちろんですが、生物学的年齢で80歳未満であること、それから60歳以上70歳までは機能不全の器官が2つ以下であること。70歳から80歳までは機能不全の器官がひとつ以下であること、という年齢と基礎疾患によるトリアージがあります。それから漏れた患者は別の病棟で、人道的な緩和ケアを行います。

医療提供体制を守るという意味でいうと、「エビデンスのないことはしない」といっています。つまり、助かる確率が極めて少ないのに、ICUを使わせていたら、本来治る人の道の閉ざってしまうのではないかと。そのなかで、日本では判断を現場の医師に委ねますが、スウェーデンは保健福祉庁という独立行政庁からガイドラインが出て、病院がそれに沿った指示を出しますので、「個々の医師がもつと献身的にやれば救えたかもしれない」などと叩かれることはありません。日本でもきちんと公的にガイドラインを定めれば、無駄な医療費がかからなくなるのですが。

神保 逆に、日本では誰が反対するのですか？

渡邊 助かる可能性を最後まで追求したいという現場の医療界もありますし、それを求める家族の声です。国民的な反応としても、そういう鉄面皮みたいなことではないのかと。これはおそらくメディアも叩くと思います。政府がガイドラインの徹底を図ることとは困難です。

結果、現場の医師に負担が集中し心身ともに疲弊します。冷静な議論の道筋を探るべきでしょう。

宮台 よく言われることですが、戦争が身近な国、例えば徴兵制があるところでは、野戦病院ではトリ

アージが当たり前で、救命確率が高い人たちに医療資源をその順番で配分していく以外にありません。そうしないと戦力が維持できないということです。

なので日本は、そういう意味でいえば当然平和ボケをしているし、万人の命は平等だという建前だけで、それなりにシステムを回せる環境にあるということだと思います。本当は誰もが何が合理的かということとがわかっていてもそれを言わないというのは、「裸の王様」的に、日本にはよくあることですね。

スウェーデンの根底にある ノルディック・ウェイの真意

神保 一方で、スウェーデンは国際競争力が非常に高いことも注目すべき点です。1人あたりのGDPで見ると、スウェーデンは実はアメリカ、シンガポールに次いで世界3位なんです。ちなみに日本は22位です。同時にIMDが出している世界競争力ランキング、これはかなり多くの指標を考慮に入れた結果なのですが、スウェーデンはこちらでもしっかりと世界で第6位に入っています。「スウェーデン・パラドックス」(湯元健治、佐藤吉宗著/日本経済新聞出版)という本の受け売りになりますが、高福祉高負担の社会民主主義経済で、そんなにガリガリ働かなくても楽に暮らせそうに見えるスウェーデンが、実はものすごい競争社会で、国を挙げて競争力を上げるためにさまざまな施策を打っているという、この国のやや意外な二面性をもってして、「スウェーデン・パラドックス」と呼ぶそうです。この本によると、協調的な労使関係、産業構造、教育水準、それからITインフラに税制上の優遇措置などが源泉となつて、スウェーデンは社民主義的な国でありながら競争社会を形成し、実際に国際的にも高い競

争力を誇っている。

渡邊 補足すると、2011年のダボス会議で、スウェーデン政府が「ノルディック・ウェイ」(北欧の流儀)という冊子を配り、自国の経済財政運営の成功の背景を述べて、債務で苦しむ南欧諸国その他にアピールしました。経済政策ばかり語るのかと思えば、むしろメインメッセージは「北欧の愛」でした。その趣旨を私なりに概括すれば、夫婦の間でも不平等な従属的關係に依存しない自律と平等の維持こそが、スウェーデンが求める純粋な愛の姿。福祉の究極の目標である。自己犠牲やボランティアはダメ、専業主婦などもつてのほかで、勉強して働いて税金を納めるといふ基本を守れ、その上で弱い企業を捨ててもその個人を守るため職業の流動化を徹底する、その人たちの生活と教育の経済的保障を図ることこそ、国際経済の荒波を乗り切る強い企業と国を作る真の経済政策だと主張するのです。率直に言って、相互依存と絆を信奉する私たちにはついていけないところも多いのです。

日本では、仕方がない面はありますが、コロナ禍で苦しむ旅行業や温泉旅館や飲食店などの存続をどうにかしようとしています。おそらくスウェーデン人からすると、こういう中小零細企業の温存政策では国際経済の荒波を過ごしていけない。競争力のない地元選挙区の企業を守ることがポイントではない。むしろ伝統的中小企業保護政策を見直し生産性を高めることが経済政策の基本だと自信を持って語るでしょう。

宮台 コロナについて、死者の数が少ない、というのをどう考えるか。以前、この番組でもマイケル・ムーアの『ボウリング・フォー・コロンバイン』というドキュメンタリー映画の話をしたことがあります。そこでムーアのインタビューを受けた当

時全米ライフル協会会長のチャールトン・ヘストンが、「カナダと比較すれば世帯保有率が同じくらいなのに、アメリカの方が銃による死者が二桁多い。銃は規制すべきではないか」と問いかけられて、「銃を規制すれば確かに犯罪は減るが、銃こそアメリカの心のシンボルであって、銃を規制したら、もうそれはアメリカではない」という趣旨の話をしました。これは強烈な答えです。

ただ社会学者として言わせていただくと、「自分たちの生きている社会がどういう社会か」ということに関わるある種の共同幻想と言われるものであり、実はヘストンの言っていることはオースドックスなものです。スウェーデンもそうで、「ノルディック・ウェイ」を捨てて死者数が下がったとしても、もはやスウェーデンとは言えない、という考え方をすることも実はできる。僕の考えでは、そういう思考はとても大事だと思うのです。それぞれの社会にウェイ・オブ・ライフがある。

神保 アイデンティティに近いものですね。その点で、「ジャパニーズ・ウェイ」というものはありますか？

宮台 昭和の時代にはありましたね。例えば当時のホラー映画を見ると、場所に呪われる、というのは日本にしかないパターンだった。元々日本は血縁ではなくて地縁であり、その分、ネイバーフッドが土地に結びついているという特徴があった。しかし、

今の日本人は生活が楽になればどこにでも移動するし、その意味では「貧乏でもこの土地を豊かにするぞ」というふうなコミットする人はいなくて。映画のコンテンツを見るだけで、この30年でジャパニーズ・ウェイは失われたということがわかります。なので、それを反映する恐怖映画が、最近20年くらい作られていて、つまり日本人は土地を忘れたので、土地から復讐される、というタイプのものが増えていきます。迂回をしましたが、ジャパニーズ・ウェイは確かにない。だから、感染者数、重症者数、死者数とその数の比較だけでうまくいっている／いっていないということを考える。これは非常に心が貧しいと思います。その意味では、「これがノルディック・ウェイだ」とわざわざダダボス会議

夫婦の間でも不平等な従属的關係に依存しない自律と平等の維持こそがスウェーデンが求める姿。福祉の究極の目標。

—— 渡邊

に出て行って説教をたれるぐらい自信があるというのは、非常に羨ましいですね。

渡邊 ひとつ言うと、スウェーデンにおける在留邦人は、35年前は12000人しかいなかったが、今は42000人いて、数字を伸ばしているのは女性です。スウェーデン語を覚えなければいけないという難しさはありますが、それでもどんどん増えている。スウェーデンにおける日本企業の駐在員本人でも目に見えて女性が増え、企業駐在員を含む長期滞在者の多数派は女性という珍しい国です。現地日本人会長も女性です。日本企業の女性社員や医師・教師・学生は、このノルディック・ウェイに魅力を感じてス

ウェーデンに赴くのです。ジャパニーズ・ウェイが衰退した日本において、社会の半分を占める女性がスウェーデンになだれ込んでいくことをどう考えるか。日本の指導層や中高年男性は尻込みしますが、日本の女性、特に自己実現を求めるような元気な女性にとって、スウェーデンは相当魅力があるのです。

神保 長年スウェーデンに住まれた経験のある渡邊さんは、スウェーデンは好きですか？

渡邊 もう6年以上過ごしたので、美しい自然と温かい友人たちに恵まれ、懐かしさいっぱいですが、さまざまな考えを巡らせるきっかけも頂きました。元気があれば、住みやすい素晴らしい国です。他方、日頃から内輪の声もたくさん聞いてきましたから、「好きだ」という言葉には収斂しないかもしれませんが、自分の体の少なくとも6分の1くらいはスウェーデン人じゃないかと思っっているような感じですね。

神保 宮台さん、今回お話を聞いていかがですか？

宮台 特に女性の社会学者には、やはりスウェーデンに留学する人がもともとすごく多いし、また僕が大学生だった80年前後の日本がそうだったように、理屈を言える人が尊重される社会であることを羨ましく思います。そうでなければ生産性も上がらないし、抑圧されている人間が声をあげるチャンスもなくなってしまう。そういう意味で、日本はこのままだと生産性の回復はできないなと。つまり、何が合理的なのか言えないのだから。

神保 日本にとっても参考になる面が、多くあったような気がします。本日はありがとうございました。

（「マル激トーク・オン・ダイヤモンド第1012回」を加筆、再構成して掲載）